

古典文学の名作

古事記

太安万侶
おのやすまろ

(景行天皇 望郷の歌)



そこより出でまして、能煩野に至りし時に、国を偲ひて、歌ひて言はく、

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるはし

(倭建 命が) そこからさらに進んでいらっしやって、能煩野に着いた時に、故郷 (大和) を懐かしんで、歌って言うには、

大和はすばらしい国だ。重なり合う青い垣根をめぐるような山々、その山々に囲まれている大和は、美しい。

また、歌ひて言はく、

命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の 熊櫓が葉を

髻華に挿せ その子

また、歌って言うには、

(私と違って) 命の無事な人たちは、(たたみこも) 平群の山の大きな櫓の木の葉を、髪に挿すといい。お前たちよ。

この歌は、国惣ひ歌ぞ。

また、歌ひて言はく、

愛しけやし 我家のかたよ 雲居立ち来も

この二首の歌は「国惣ひ歌」（望郷の歌）である。

また歌って言うには、

懐かしいよ。わが家のほうから雲がこちらに湧き上がってくるのだ。

これは「片歌」である。

この時に、御病、いとはかなり。しかくして、御歌に言はく、

乙女の 床の辺に 我が置きし 剣の太刀 その太刀はや

この時、ご病状が急変して危篤になった。そうして、お詠みになったその歌は、

乙女（美夜受比売）の床のそばに、私が置いたままにした太刀（草那芸の剣）、ああその太刀よ。

歌ひ終はりて、すなはち、崩りましき。しかくして、駅の使ひを奉りき。

歌い終わるやいなや、お亡くなりになってしまった。そこで、早馬の急使を大和にお遣わし申しあげた。

古今和歌集



やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。

世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの
聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を
聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。(仮名序)

日本の歌は、人の心を種にして(生い茂り)、無数の言の葉になったものである。世の中
に生きている人は、関わる事柄が多いもので、心に思ふことを、見るものや聞くもの
に託して、(歌として)表現しているのだ。花に鳴く鶯や、水に住む蛙の声を聞くと、生き
ているものは全て、歌を詠まないということがあるだろうか。

力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思
はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。

力をも入れずに、天地(の神々)を感動させ、目に見えない鬼神をも、「ああ」と思わせ、
男女の仲をも親しくさせ、勇ましい武士の心をも楽しくなるようにするのは、歌である。

とさ
土佐日記

きのつらゆき
紀貫之



男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。

その年の師走の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよし、
いささかに物に書きつく。

男も書くと聞いている日記というものを、女（である私）も書いてみようと思って書くのである。

ある年の、十二月二十一日の戌の時（午後八時頃）に、門出する。その様子を、少しばかり、物に書きつける。

ある人、県の四年五年果てて、例のことども皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよく比べつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつのしるうちに、夜更けぬ。

ある人（貫之）が、任国（土佐の国）での四、五年の任期が終わって、国司交代時の公務引き継ぎの通例の事務を皆すませて、解由状などを受け取って、住んでいた国司の官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移る。あの人この人、知っている人も知らない人も見送りをする。（中でも）長年親しく交際してきた人々は、別れがたく思っ、一日中、あれこれしては大騒ぎするうちに、夜が更けてしまった。

二十二日に、「和泉の国まで。」と、平らかに願立つ。藤原のときぞね、
船路なれど、馬のはなむけす。上、中、下、酔ひ飽きて、いとあやしく、
潮海のほとりにてあざれ合へり。

二十二日に、「和泉の国までは、無事であるように。」と、神仏に願をかける。藤原のときぞねが、船路（の旅）であるのに、「馬のはなむけ」送別の宴をする。身分の上・中・下関係なく、皆すっかり酔っぱらって、たいそう奇妙なことに（ものの腐るはずのない）塩分のきいた海のほとりで、腐った魚が打ち上げられているように、（泥酔して）ふざけ合っている。

伊勢物語

昔、男、初冠^{うひかうぶり}して、奈良の京、春日^{かすが}の里に、しるよしして、狩^かりにいにけり。その里に、いとなまめいたる女^{をんな}はらから住みけり。この男、かいま見てけり。思ほえず、ふる里にいはしたなくてありければ、心地^{こち}まどひにけり。

昔、男が、元服して、奈良の都、春日の里に、領地のある関係で鷹狩^{たか}りに行った。その里に、たいそう若々しく美しい姉妹^{しまい}が住んでいた。この男は、(その姉妹を)隙間^{すきま}から見てしまった。思いがけず、(こんな)さびれた旧都に、(姉妹が)とても不つりあいな様子でいたので、(男は)心乱れてしまった。

男の、着たりける狩衣^{かりぎぬ}の裾^{すそ}を切りて、歌を書きて遣^やる。その男、忍摺^{しのぶ}りの狩衣をなむ着たりける。

春日野^{かすが}の若紫^{わかむらさき}の摺^すり衣しのぶの乱れ限り知られず

男が、着ていた狩衣の裾を切って、(それに)歌を書いて贈^{おく}る。その男は、忍摺^{しのぶ}りの狩衣を着ていた。

春日野の若い紫草のように若々しく美しいあなたがたを見て、私の心は、この忍摺^{しのぶ}りの乱れ模様^{もよう}のように、限りもなく心乱れています。

となむ、追ひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひ
けむ。

陸奥^{みちのく}の忍もぢ摺^{たれ}り誰^{たれ}ゆゑに乱れ初^そめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。

昔人は、かく、いちはやきみやびをなむしける。

と、すぐに歌を贈^{おく}った。事なりゆきが趣^{おもむき}深いこととも思ったのだろうか。

陸奥の忍摺^{しのすり}りの乱れ模様のように、あなた以外の誰^{だれ}のために、心が乱れ始めた私ではな
いのに（あなたのために、私は心乱れているのです）。

という歌の趣向^{しゅきやう}（によったの）である。

昔の人は、このように、情熱的で風流なふるまいをしたということだ。

源氏物語

紫式部



いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、
いとやむごととなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

どの帝の御代であったのでしょうか、女御や更衣が大勢お仕えしていらした中に、それほど高貴な家柄ではないかたで、格別に帝のご寵愛を受けて栄えていらっしゃるかたがいました。

初めより、我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものに貶め
そねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。

(宮仕えの) 初めから、自分こそはと自負していらっしゃるかたがたは、目ざわりなものと蔑み憎みなさる。同じ程度や、それより低い身分の更衣たちは、まして心穏やかではない。

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ
生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御
覧するに、めづらかなる児の御容貌なり。

前世でも（お二人の）宿縁は深かったのだろうか、世にまたとないほど美しい、玉のよ
うな皇子までがお生まれになった。（帝は）早く（皇子を見たい）と待ち遠しくお思いになっ
て、急いで参内させて御覧になると、めったにないすばらしい容貌である。

ほうじょうき
方丈記

かももちょうめい
鴨長明



行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮
かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。
世の中にある、人と栖すみと、また、かくのごとし。

流れる川の流れは絶えることなく、それでいて、（水は）もとの同じ水ではない。よどみ
に浮かぶ水の泡あわは、一方で消えると、一方ではできて、いつまでもそのままにいるためし
がない。この世の中に存在する、人と住居も、またこのようなものである。

玉敷きの都の内に、棟を並べ、薨を争へる、高き賤しき人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは、去年焼けて、今年作れり。

玉を敷きつめたように美しい都の中に、棟を並べ、屋根の高さを競っている、身分の高い人や低い人の住居は、幾代を経ても絶えることがないものであるけれども、これを真実かと調べてみると、昔あった家はほとんどない。あるものは、去年焼けて、今年造ったものだ。

あるいは、大家滅びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるる慣らひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

あるものは、大きな家が没落して小さな家となっている。住んでいる人もこれと同じだ。場所も（同じ所で）変わらず、人の数も多いけれど、昔会ったことのある人は、二、三十人の中に、わづかに一人か二人である。朝に（誰かが）死に、夕方に（誰かが）生まれる世の常は、まさしく水の泡に似ているものだ。